

「とんでもない言いません」という表現について

遠 藤 潤 一

の記事から抜き出して掲げてみよう。

● 次の文は、Aさんが年上の人にちよつとした贈り物を手渡したところ、その年長者が「略 何かお返しを(略)」といい、それに対してAさんが口にした言葉である。そのなかで敬語の使い方としてまちがっているのはどれか。

- ① とんでもないことです。
- ② とんでもありません。
- ③ とんでもございません。
- ④ とんでもない。

以上であるが、この問いは、正解は③となっている。つまり「敬語の使い方としてまちがっている」のは「とんでもございません」であるというわけである。

ところで、「敬語の使い方としてまちがっているのは」と言っているが、これは敬語用法についての問題なのだろうか。選択

(昨年)の九月、後期の授業が始まったとたんに、学生数名から質問を受けた。「とんでもございません」という言い方はどうして間違いないのか、という質問である。筆者はとっさに、それが九月十五日の新聞に出ていた「日本語力測定試験」についての記事にあつた問題例の一つであることに気付いた。

筆者が読んだ「朝日新聞」平成十年九月十五日の朝刊の記事は「日本語の『腕試し』いかが?」というタイトルで、出版社「明治書院」が出資する「日本語学研究所」が十月二十五日に全国二十四箇所を実施するというその試験の紹介のような記事で、掲げられている「日本語力測定試験問題例」には、

「とんでもない」○／「とんでもございません」×

という小見出しも付いている。学生たちが質問した問題をそ

肢を見ると、①・②・③はたしかにそれぞれ「です」「ます」「ございます」という丁寧語が見えるが、④には敬語が見えない。④は、この場合には敬語が使えないという意味の選択肢と考えればよいのか。それはそれとして、果してこれは敬語の問題か。「とんでもございません」が敬語の使い方の誤りであると言われると、反論しないわけにはいかない。「とんでもございません」が誤りであるというのなら、敬語の用法として、この場合「ありません」は使えるが、「ございません」は使えないということになつてしまふ。しかし、これは理由の説明ができないであらう。

掲げられた例題の中で、筆者が問題視したのは、実はこの問いなのであつた。これは敬語用法の問題なのではない。形容詞の用法の問題なのである。「とんでもない」は形容詞だから、「とんでもありません」とは言えないのである。同時に、「とんでもございません」とも言えないのである。

二

ところで、九月十九日(土)の「朝日新聞」朝刊に、右の問に関する次のような記事が出た。

訂正 十五日付「日本語の『腕試し』いかが?」の記事で、例題としてあげた四題のうち、最後の問題の解答が「③」とあるのは「②と③」の誤りでした。「とんでもない」という言葉の敬語の誤りを問う問題でしたが、②の「とんで

もありません」も誤用です。

これは右の問題についての訂正記事である。誤用は「とんでもございません」だけでなく、「とんでもありません」も誤用である、と訂正している。しかし、「敬語の使い方」の問いではない、という意味の訂正はされていない。これでは問題の解決になっていない。敬語の観点から、「ありません」「ございません」は「とんでも」に付けるのは誤りだ、と言うつもりなのであろうか。しかし、その理由の説明は形容詞「とんでもない」の観点からでなくてはできないであらう。

なお、この「とんでもございません」「とんでもありません」を誤用として指摘する見解について、管見に入つたものを挙げてみよう。

和田利政監修『日本語の知識百科』(主婦と生活社・昭和六十二年三月)の第一章「日本語はどこへ行く ことばの最新情報」の「街を行けばあやしい日本語の大行進」の中に次のような指摘がある。

「とんでもございません」

お上品なちよつとすましたご婦人が、よくこんなことを口にする。「とんでもない」は「少ない」「危ない」と同じように「——な」までが語幹。「とんでもある」「とんでもない」という対応のあることではない。当然「とんでもありません」も間違い。「とんでもありません」「とんでもございません」と言うかどうかを考えれば、すぐ間違いに気付

くはずである。

以上であるが、ここでも、当然のことではあるが、敬語用法の誤りなどとは言っていない。形容詞の用法の誤りを示唆しているのである。

三

「とんでもありません」「とんでもございません」が形容詞の用法上の誤りであることの理由は、『日本語の知識百科』から引用した右の文章を読めばわかることではあるが、ここで、筆者が学生たちに説明したことを中心にして少々述べてみようと思う。

右の『日本語の『腕試し』いかが？』の問題で、まず選択肢①の「とんでもないことです」の「とんでもない」は連体形であり、形容詞の用法としてはなんら問題は無い。

次に、選択肢②の「とんでもありません」であるが、これは形容詞の用法として誤っている。なぜならば、「ありません」に続く場合は連用形「とんでもなく」となり、「とんでもなくありません」とならなければならないのだから。

しかし、「とんでもなくありません」は「とんでもない」の意を否定する表現となってしまう。

選択肢の③「とんでもございません」は、②の「ありません」が「ございません」に替わっただけの違いであるから、誤りの理由は②の場合とまったく同じである。

最後の選択肢④の「とんでもない」は形容詞そのままの用法（終止形）の一語文で、これには問題は無い。

ところで、形容詞の用法から見て問題が無いのは、

① とんでもないことです。

④ とんでもない。

であるが、この二つについて、年長者に対する返答という観点から考えてみることにしよう。

年長者にちよつとした贈り物を手渡したところ、「——何かお返しを——」と言う年長者に対して、Aさんが返す言葉としては、この①・④はどうなのか。

まず、①の「とんでもないことです」は、返答として一つのみとまった内容の文である。しかし、付け加えて言うならば、少々大げさな感じ、詰問調という感じがしないでもない。だが、その辺のところは、二人の対話の雰囲気がこの返答を生かしても殺しもするというであろう。要するに、形容詞の用法から見ても、「です」という丁寧語を用いている点から見ても、この①は年長者に対する返答として、一応整っていると見える。

次に、④の「とんでもない」であるが、これは一語一文であり、年長者に対する返答としては言葉不足の感がある。あとに文が続き、たとえば「感謝のほんのおしるしですので、お心遣いなく——」のような文で返答が完結するというのでなければ中途半端であるし、年長者に対する返答としてはぞんざいで

ある。形容詞の用法としては正しいのだが、こんな感じがする。そのため、「とんでもありません」「とんでもございません」という言い方が生じてしまったのであろう。

さて、この問題の作成者の意図はどの辺にあるのであろうか。誤用はどれかという問いで、「訂正」による正解は「②と③」ということであるから、①と④は誤用ではないということ、それで済むと考えているのであろうが、右のように考察してみると、当然、割り切れない気持が残る。

「とんでもない」は形容詞であるから、その「ない」は「ありません」や「ございません」に替えることができない、というのが出題の主旨であるとしたら、正しい用法の比重は④に傾くであろう。前掲の新聞記事の、

「とんでもない」○／「とんでもございません」×
という小見出しも、この考え方が背後にあるのであろう。

また、前掲の新聞記事のこの問題文に、「敬語の使い方として」とあるが、そのように年長者に対する敬語の使い方として、というのが出題の主旨なら、正しい用法の比重は①に傾くであろう。

要するに、この問題の出題の意図は分裂している、熟慮されていない、としか言いようが無いのである。

四

それでは、どうして「とんでもありません」「とんでもございません」という言い方が生じたのか。前章において、年長者に対する返答という観点から選択肢④「とんでもない」に言及した際に、「とんでもない」は一般的に年長者に対する返答としてはぞんざいであり、そのようなところから、「とんでもありません」「とんでもございません」という言い方が生じてしまったのだらう、と述べたが、ここでは別の観点からその問題について考えてみたい。

その前に、まず、「とんでもない」という形容詞そのものについて考えてみよう。

この「とんでもない」は形容詞といつても複合形容詞（派生語形容詞）なのであるが、その成立についてははっきりしない。可能性として次のような考え方ができると思う。

- ① 近世では「とでもない」ともいう。「とんでもない」と語意の一部が共通する語として「途方とちほうもない」「途轍とちやくもない」がある。これらは「とんでもない」より古い語である。そうすると、近世語の「とでもない」の「と」は名詞「途方」「途轍」のいずれかの省略で「途」となったものかとも考えられる。または、「道・方法・手段」の意味の名詞「途とち」かとも考えられる。

- ② 「とんだ災難だ」などと使う「とんだ」という語がある。

動詞「飛ぶ」には「思いも寄らないほど風変わりな」のうな意味もあり(近世語)、そこからこの「とんだ」という語が生まれたのである(注1)。この連体詞「とんだ」は「とんでもない」と同意と言える。そうすると、「滅相な」「滅相もない」のように、「とんだ」の下に「もない」を付けたから「とんでもない」となったのかと考えられる。そして、「もない」の「ない」は打消しの「無い」ではなく、強調の「ない」である。強調の「ない」も「滅相もない」のように、上に「も」の入る例がある。

以上であるが、『日本国語大辞典』(小学館)の「とんでもない」「とんだ」の項を見ると、これらに類似した考え方がすでに発表されているようでもあるが、いまだ管見に入らない。この点、念のために記しておきたい。

このように、「とんでもない」という語にはわからないところがあるのだが、現代では、「とんでもないやつだ」というような非難の言葉や、「とんでもない！」という強い否定の気持ちを表す言葉、また「とんでもない仕合せ」など、予想外であるという気持を表す言葉として、日常的によく用いられている。それ故、「とんでもない」を「非難・否定・予想外」といった意味で用いられる語というところえ方をしておくことにしたい。

さて、それではどうして「とんでもありません」というような言い方が生じたのか。

前掲の『日本語の知識百科』からの引用文の趣旨をもとにして考えてみることにしよう。

「とんでもありません」のような言い方が生じたのは、一言で言えば、

○ この夏は時間も無いので、ヨーロッパ旅行は無理です。のような言い方からの「誤った類推」によるということになる。このような、「時間も無い・時間もありません・時間もございません」という一連の言い方に引かれて、「とんでもない」を「とんでもありません・とんでもございません」と言うようになったのであろう。そして、それが「誤った類推」によるものであるということは、「時間もある」に対して「とんでもない」と言えるかということを考えればすぐわかることである。

「とんでもありません」という言い方がどうして生じたのかという問題についてはこのように考えることができる。ただし、これは一つの考え方に過ぎない、ということをおわつておかねばならない。

五

「とんでもありません」という言い方ができないから「とんでもありません」は誤用であるというのが前章までの考え方であったわけだが、それで問題は解決したのであろうか。筆者は、「とんでもありません」という言い方は無いのがあたりまえだと考える。これは、「——ある」「——ない」の対応で考えてはい

けないのである。

「とんでもありません」がどうして生じたかについて、別の考え方を示してみよう。この小論文では、筆者のこの考え方を示すことが目的の一つになっている。

「とんでもありません」という言い方が生じた理由として、筆者は次のようなことを考えている。

○ 下に否定の表現「無い」や強調の「ない」を伴うのが一般的な名詞があるが、その用法との類推による。この名詞は形容詞や形容動詞の語幹にもなる。

右のような考え方であるが、まず、そのような名詞の例を挙げてみよう。

(名詞) (名詞の用法) (形容詞・形容動詞)

① 途方・途方もない・途方ない (近世語)

② 途轍・途轍もない・途轍ない (近世語)

③ 滅相・滅相もない・滅相な

④ たわい・たわいもない・たわいがない

※ (×) (とんでもない) (×) (×)

このほかにもあるはずだが、まずこれくらいで考えてみよう。

①・②・③はそれぞれ「——もない」の形が「とんでもない」と意味の上でも共通する例である。以下の論では「もない」「ない」が打消しや強調かについては考慮しないことにする。

※印は対比させた「とんでもない」。

さて、①～③の「途方もない」「途轍もない」「滅相もない」

の「途方」「途轍」「滅相」は名詞である。しかし、「時間もない」の場合と違って、「時間もある」のような言い方は無い。④の「たわいもない」の場合についても同様のことが言える。「たわい」は「たわいもない」という言い方があるが、「たわいもある」という言い方は無いのである。「たわい」は下に否定表現を伴うのが一般的用法であるからである。このような言い方との類推によつて「とんでもない」という語が生まれたのであろうと考えられる。「とんで」は名詞ではないが、「——もない」という形と意味の①～③との共通性から見て、このように考えられるのである。

ところで、その「とんでもない」は「とんで」が名詞ではないから、一語として処理し、形容詞とするのである。それ故、「途方もない」は形容詞ではないが、「とんでもない」は形容詞であるということになる。

さて、「途方もない」は形容詞ではなく、連語であるから、「時間もあります」の場合と同様に、「途方もありません」と言える。一方、「とんでもない」は形容詞であるから、「とんでもありません」とは言えないということになる。しかし、生きた言葉はそんなこととは関係が無い。「とんでもない」を意味・形態の類似から、「途方もない」「滅相もない」と並べてとらえる意識があれば、「途方もありません」「滅相もあります」に引かれて「とんでもありません」という言い方が生じてでも不思議ではない。堅苦しく言えば、「とんで」が名詞ではないのだ

から、これも「誤った類推」ということになるが、だからといって、誤りの証拠として、「とんでもありません」と言えるか、と責めることはできない。「途方もあります」「滅相もあります」とは言わないのだから、当然、「とんでもありません」も無いのである。「——ない」は常に「——ある」と対応するわけではない。

このように、「とんでもありません」は「誤った類推」による言い方には違いないが、「時間もありません・時間もありません」の場合と同列に論ずることはできないのである。また、「とんでもない」は形容詞ではあるが、第四章の語構成①・②で述べているように、語の構成において連語と見ることもできそうな複雑な問題を抱えており、その点で、単純な「少ない」や「危ない」と同列に見ることはできないのである。

「とんでもありません」という言い方には、このように、理解を示して許容すべき理由がある。それをも無視して、無下に「誤用」ときめつける資格を我々は持つているであろうか。つまり、「とんでもありません」を誤用ときめつける考え方には再考の余地があるということである。

『日本国語大辞典』（小学館）の見出し語「滅相」の語釈の末尾にある小見出し「めつそももない」の「**方言**」の項の説明文中に、次のような記述がある。

③礼を言われた時などの挨拶のことは。どういたしまして。
とんでもありません。大阪市「いいえ めつそももない」

「ません」

これは、礼を言われた時などのあいさつで、「とんでもありません」という意味で、大阪市では「めつそもございません」と言うという説明であるが、この筆者傍線部前者「とんでもありません」は辞書執筆者の用いている言葉である。一言で言えば、現代の代表的な「国語辞書」にも誤用があるということにもなってしまうのである。なお、すでに述べたように、筆者傍線部後者「めつそもございません」には誤用か否かというような問題は生じない。

ここで、文化庁編『言葉に関する問答集 総集編』（平成七年三月）を取り上げよう。その「三 敬語、その他の問題」の「敬語」の部に、「とんでもございません」についての問答が掲載されている。

問「とんでもございません」という言い方はおかしくないか

という問いである。

この**答**は、前半部で「とんでもない」を形容詞の観点からとらえ、「とんでもございません」を適切な言い方ではないという方向で説明している。

次に、段落を改め、次のように述べているのである（傍線筆者）。しかしながら、「とんでもない」には、普通の形容詞から転じて、「相手の言葉に対して強く否定する気持ちを込めて言うときのあいさつ語」としての用法がある。その場

合にまで「とんでもないことでございます」と言うべきだと論じても、実際問題として行われるかどうかが疑問である。この方は普通の形容詞としての「とんでもない」とは用法が異なるのであり、「あじけない」と同列には扱えないのである。「とんでもございません」があいさつ語として現在のように一般化した段階では、これを不適切な言い方として退けることは好ましくもないとも言えるわけである。
(注³ 14—39)

このように述べて、答えを締めくくっている。筆者傍線部は、あいさつ語としてどのように「用法が異なる」のかはつきりしないが、とにかくこのように述べているのである。

この答えの冒頭部は、

〔答〕あるべきことではない」「決してそんなことはない」という意味で、「とんでもない」という言い方がある。これを丁寧に言おうとして「とんでもございません」と言う人がいるが、これは適切な言い方かどうか、という問題である。

とある。この問いを「敬語」の部に入れた理由ははっきりしないが、筆者傍線部のように、「とんでもございません」の「ございません」が丁寧表現であるからなのか。また、前述の「日本語力測定試験問題例」でこの問いを「敬語の使い方」の問題としている理由はこの辺にあるのか。いずれにしても、筆者がすでに述べているように、これは敬語の問題ではない。

なお、ここで同じような問題の生じる語に言及してみると、「みつともない」という形容詞は「みつともいい」「みつともよくない」の形を派生させている。これも類推によるのである。前記の辞書から例を拾うと、前者は、

はたから見て余り見ともいい者ぢやない (夏目漱石・吾輩は猫である)

後者は、

天秤を肩へ当るも家名の汚れ、外聞が見つとも宜くないといふので (二葉亭四迷・浮雲)

がある。

「みつともない」の意味は、「人が、見たくもないと思うような」の意が元であろうということは、一般的に容易に想像がつくことであろう。語源「見たくもない」から考えれば、当然「見たくも」の下に「よい」や「よくない」は来ないはずである。また、「みつともありません」は誤用ということになる。語源「見たくもない」を意識している人は、それと「見たくもありません」という表現とを土台にして、「見つともない」に対して「見つともありません」という類推による形が、口から自然と出てしまうかも知れない。しかし、「見たくもない」は単語ではないが、「みつともない」は単語(形容詞)なのである(現代語では意味も違う)。それ故、「みつともありません」とは言えないということになる。一方、「見たくもありません」にはなんの問題もないのである。

この小論で、「とんでもありません・とんでもございません」についての二つの考え方を述べた。一つは「とんでもない」を形容詞という観点でとらえ、「とんでもありません・とんでもございません」を誤用とする考え方である。そして、これはこの小論執筆のきっかけとなった「日本語力測定試験問題例」の出題意図の延長線上で考えた見方である。それに対して、第五章においては、それとは別の見方、すなわち言語変化という観点で、類推による派生という見方でもとらえたものである。

そして、そのどちらが通説と言えるかという点、形容詞の用法という観点に立った誤用説の方ではないかと思われる。すでに、その見解は公表されているし、また、今回の報道はその見解の浸透に拍車をかけることになったと言える。

しかし、「とんでもありません・とんでもございません」という言い方を、ごく自然な言い方として使っている人々もいるのである（それでなければ問題として出題されない）。また、そのような言い方がどうして生じたかについては、小論第五章で述べたような考え方もできるのである。

この小論の結論として、「とんでもありません・とんでもございません」を誤用と締めつけるこの問題は適切ではない、と言いたい。これが小論の主旨である。

ところで、「正しい言葉」という見方と「言葉の変化」という見方とは、両者は決して相容れる余地のないもののように考えられがちである。しかし、生きた言葉に接する以上、我々はこの二つの観点のどちらをも欠くことはできない。この二つの見方を両極として言葉を観察することが大切なのであるが、学生を見ていると、この点にとまどいを感じる人、隔靴搔痒の思いをいだく人が多いようである。あれこれ言わずに手取り早く「正しい日本語」を教示するのが、大学の国語学担当教員の務めだと考えているかのようなようである。今後、この傾向が強くなるのかも知れない。

しかし、「正しい日本語」の「正しい」は絶対的価値を意味するものではない。「規範、すなわち正しい日本語」という考え方、このように絶対的基準を求めようとする考え方は、我々日本人を不幸に陥れるだけである。「正しい日本語」はどこにあるのか、我々は「正しくない日本語」ばかり使っているのではないか、ということになってしまっている。絶望感・虚脱感、そして末世観をいだくことになるだけである。若い人々がこの矛盾から解放されるようにと願いつつ、筆者は授業をしていくつもりである。

時間の流れ、時代がある時点からある時点まで輪切りしてとらえようとすれば、それはいつの時点でもとらえても、緩急の程度の差こそあれ、常に「過渡期」である。それ故に、「規範」は必要なのである。しかし、その「規範」は絶対的なものでは

ありえないはずである。「規範」を、変化をふまえ、それを見越した方向に求めるか、または、過去の慣習、いわゆる「伝統」を振り返って求めるか、という根本的問題が残されるが、現在の社会通念で「規範」といえば、それは後者の見方である。それ故、いや、いずれにしても、いわゆる「規範」は言葉を選ぶ際のおおよその指針というくらいの意味での「現実の目安」程度として認識すべきものである。換言すれば、「正しい」より「より良い」という相対的な認識である。やたらに「正しさ」を標榜するのは精神的に不健全なことである。

〔付記〕 本稿のテーマは新聞記事によるものなので、同趣の論が種々出ることも予想される。この点、一言おことわりし
ておきたい。

(平成十年十一月五日)

注

(1) 『古語大辞典』(小学館・昭和五十八年)の「飛ぶ」の語釈④を掲げておく。

④(とび離れる意から)異風である。奇抜である。「あまり作り過ぎて――びたる句ばかりなれば、あへて点もなし」(ト養狂歌集)。「足本しらずの鹿相(そさう)者と見え侍れど、一足……んだる作意もをかし」(貝おほひ)

この筆者傍線部「とびたる句」、「一足とんだる作意」の「とびたる」、「とんだる」のような形から「とんだ」が生まれたものと考えられる。なお、この辞書には「とんだ」「とんでもない」はあるが、「とんでもない」は無い。

(2) 見出し語「とんでもない」の補注に、

「とんでもない」の変化したもので、その「と」は、副詞の「と」あるいは名詞の「と」(途)と考えられている。とある。また、見出し語「とんだ」に、「とんでもない」からできた語か」とある。

(3) この問いは「言葉に関する問答集 総集編」の前身である「言葉に関する問答集」の第14集に「問39」として掲げられたもの。第14集は昭和六十三年三月の発行で、本論で掲げた『日本語の知識百科』の発行と同年・同月ということになる。

以上